翻刻

井上円了手書きノート(1-1-3-1)「古代哲学」(上)

柴田隆行
shibata takayuki

〔解題〕

(1)　井上円了による手書きノートが井上円了研究センターに多数所蔵されている。翻刻者は、いわゆる科研費による村山保史大谷大学教授を中心とした共同研究に参加し、井上円了が学生時代に作成したと思われるノートの翻刻を数点試みた。明治十六年以降作成の、「稿録」と表紙に記されたノートの邦訳は本年報 Vol.19 (二〇一〇年) に掲載された。この原典翻刻は喜多川豊宇氏により一九八八年「井上円了英文稿録解」と題して公開されている(東洋大学井上円了研究会第二部会編『井上円了と西洋思想』東洋大学井上円了記念学術振興会基金発行)が、誤植や誤読、脱字が多く使用に耐えないので、筆者が新たに翻刻し直した。同じく東京大学哲学科生時代のノートと思われるものとして、現在わかっている限りで、本ノート (1-1-3-1 という整理番号を記されている) のほかに、「最近哲学史」(1-1-3-2)、英文ノート (1-1-3-3)、「英国哲学書」(1-1-3-4)、「東洋哲学史　巻一」(1-1-6-1 井上哲次郎による講義の聴講ノート)、「稿録　乙号　哲学概説　明治十七年七月　井上円了」(1-1-6-2　同年新潟に帰郷した際に取られたノート)、「雑稿　甲号　孟子論　明治十七年九月　哲四年生井上円了」(1-1-6-10)、

「雑稿　丁号　諸稿　明治十七十八年　哲四年生井上円了」（1-1-6-11　「真理金針」の草稿）がある。他に円了の学生時代と思われる時期のノートとして、1-1-2-7 として分類された「由氏哲学史」と題する哲学史に関する雑記帳、1-1-3-5 の「古代哲学」、1-1-3-6 の論理学に関するノートがある。その他は哲学館での講義ノートがほとんどである。

（2）　ここに翻刻を掲載するノート（紙面の都合で複数回に分ける）は、その表紙頁に記されているように、井上円了が東京大学在学中の一八八四（明治一七）年に作成したものである。これは大学での聴講ノートではなく、C. S. Henry が英訳した An Epitome of the History of Philosophy. Being the work adopted by the university of France for instruction in the colleges and high schools. Translated from the French, by C.S.Henry. 2 vols. New York 1842. のうち、第一巻第一期東洋哲学と第二期ギリシア哲学の概要を翻訳し記述したものである。英訳者のヘンリーはニューヨーク市立大学の哲学教授である。英訳書には、これがフランスの大学等で使用されている教科書であり、ヘンリーが英訳したと標題紙に記されているものの、元になっているフランス語原典の書誌情報すなわち原書名、刊行年、さらには著者が誰であるかなどはどこにも記されていない。ネット検索で得られる書誌情報によると、原著者はストラスブール大学哲学教授 Louis Eugène Marie Bautain（1796–1867）であり、彼は École Normale 在学中にヘーゲルの弟子の一人 Victor Cousin の影響を受けたと言う。だが、彼の著作中にフランス哲学教育に関する研究書があるものの、一八四〇年までに公刊された彼の著作に哲学史関係のものはない。円了が参照したこの英訳哲学史の原典について、筆者は親鸞仏教研究センター研究員長谷川琢哉氏のご教示を受けた。氏の調査研究に謝意を表したい。長谷川氏はさらに、この英訳書の原典が一八三四年にパリで公刊された Précis de l'histoire de la Philosophie, publié par les directeurs du Collége de Jully であることもつきとめられた。原典は

Google books により読むことができる。ただし、このフランス語原典の著者もはっきりしない。この本が出版された当時の directeurs du Collége de Jully は Antoine de Salinis（1798–1861）と Bruno-Casimir de Scorbiac（1796–1846）であり、本書にその旨が書かれた版もあるが、彼らが「著者」だとは明記されていないし、彼らが詳細な哲学史を書いたと確信させる経歴も見あたらない。この点は今後の調査中とし、ここでは結論を保留する。なお、この本は一八三七年にブリュッセルから再版され、それと同じものがパリで一八四一年に第二版として、同第三版が一八四七年にそれぞれ公刊されたが、中身は変わらない。英訳書にはフィヒテ、ヤコービ、さらにシャフツベリ以降リードまでの英国現代哲学史が付加されている。

本ノートの記述は、仮に付した頁番号の一一六頁目で一旦終わっており、一二一頁目から記述が再開されてソクラテス以降の哲学史がノートされているが、これ以下の部分は上記英訳とは記述内容も言及された人名も対応しない。後者の原典は、その記述内容から見て、Albert Schwegler の哲学史と思われる。たとえば、ソクラテスは彫刻家の父と助産師の母の子として生まれ、最初彫刻家を目指したことや、ソクラテスがアナクサゴラスの弟子とする意見を否定する点等々はシュヴェーグラーの哲学史に詳しい。

（3）前半部分の英訳原典は、第一巻で第一期東洋哲学としてインド、中国、ペルシア、エジプト、カルデア・フェニキアが、第二期はギリシア哲学、第三期はキリスト教時代の最初の数世紀の哲学、第四期は中世哲学が論じられ、第二巻では第五期現代哲学として、第一段ニコラウス・クザーヌス、パラケルスス、テレジオ、カンパネラ、ジョルダーノ・ブルーノ等、第二段はベーコンからライプニッツまでとカントからリードまでが論じられているが、円了のノートは「古代哲学」と題されているように、英訳原典の第二期までのノートである。

英訳者のヘンリーによれば、「東洋哲学に割かれた分量は多すぎるだろう、本書の他の部分とは比較にならない。

珍しい主題というに過ぎない」（序文）という。たしかに、たとえばヘーゲルの哲学史講義でもオリエントに関する部分はあるが、さほど多くはない。とは言え、フンボルトやロマン派の影響で当時一九世紀初頭にドイツやフランスでオリエント研究が盛んに行われた事実があり、本書の記述も、概要（epitome）ではあれ、それなりの具体性は見られる。インド哲学に関しては、コールブルク（Henry Thomas Colebrooke, 1765–1837）がロンドン・アジア協会の季刊誌に連載したエッセイの紹介が本書に多々見受けられ、インド哲学に関してはコールブルクの著作を参照して記述されたと思われる。中国哲学に関しては一七世紀以降フランスの宣教師による研究が盛んに進められ、重要文献の多くがフランスに所蔵されていることから、当時のフランス人にとって資料は比較的入手しやすかったと思われる。

（4）　井上円了は東京大学生時代に英文書物の学習ノートを「稿録」と題してまとめており、そこにこのノート前半の原典と言うべきEpitome読書の抜粋ノートも見られる。そこで円了が下線を敷いて注目しているのは、著者が比較哲学的考察を加えている箇所である。たとえば、原典三四頁から「サーンキヤという言葉が数を意味するから、数がかなり重要な役割を演じるピュタゴラス教団とこの体系とのあいだに多少なりとも類似性があったとする推測にこの言葉は根拠を与えているように考えられた。だが、サーンキヤの教義についてわれわれが知るかぎりではこうした推測は確かめられない。」とか、同五一頁から「ヒンドゥー教の論理とギリシアの論理は共通の起源を持つのか。アレクサンドロス大王の遠征の時代に一方が他方を引き出したのか。あるいは、バラモン教の教義の断片がギリシアに運ばれる一方、同時にギリシアの体系のいくつかがインダス川を越えて浸透することに成功したのか。ギリシアの論理になったヒンドゥー教の論理とか、ヒンドゥー教の論理となったギリシアの論理とかいうものはあるのか。あるいはまた、たがいに影響し合うことなく並行して発展したのか。こういった

問題はまだ解かれていない。」さらに五八頁から「仏教諸派の哲学的な意見は、われわれが概観した他のヒンドゥー教のほとんどの教義よりもはるかに多く、現代ヨーロッパで明言されている体系と符合するところがある。第一派の唯心論は、バークリの唯心論と類似している。第二派の諸原理は、多くの点でカバニスの唯物論や感覚論と一致する。第三派の個体的汎神論は、フィヒテによってドイツで再現された。」（本誌第一九号、二〇一〇年、一四三～一四四頁）等々。これらの記述はしかしすべて原典からの引用であり、円了の考えではない。

（5）以下の翻刻文に記されていることがらの多くも抜粋ノートであり、円了自身の考えは、一三頁の「愚案」として挿入された一文や二一頁の「（愚案）仏ノ所謂ル我法ニ執ヲ空シ煩悩所智、二障ヲ断スルモノナルカ」、あるいは丸括弧内に記された「釈迦ノ成仏ヲスゝムル此ニアリ」（一三頁）、「『バイフル』ノ云フ所ニ似タリ」（一六頁）、「仏教ノ真如ニ似タリ」（一七頁）、「小乗ノ涅槃ニシテ所謂化身滅智ナリ」（三一頁）、「耶蘇ハ造出教、仏ハ流出教ナリ」（同右）等々の短い感想に伺える。ただし、その数はそう多くはない。しかし、円了が原典から何を選んで学んだか、彼の関心はどこに向けられていたかはここからも十分うかがえる。インド哲学史については原典にほぼ即してノートされているが、中国哲学史について、とくに孔子については原典のごく一部しかノートされていない。これは、円了が中国哲学史に興味がないわけではもちろんなく、原典に記された中国哲学史の記述からは学ぶべきものが少ないと円了が考えたからではないかと思われる。また、原著者はコールブルクの意見を所々で参照しているが、それらはいっさいノートされていない。さらにこのノートで興味深い点は、円了が外国文献をすべて日本語の概念に置き換えて考察している点である。たとえば、transmigration を「成仏」、rational を「無量」、individual liberty を「自己独立自由ノ気」等々の訳語も円了独自のものである。

（6）井上円了による古代哲学史に関する公刊書は二つある。一つは、一八八六（明治一九）年九月刊の『哲

学要領前編』であり、これは東洋哲学と西洋哲学をともに含む哲学史であり、その中に中国哲学とインド哲学とギリシア哲学の歴史もごく簡略ながら記述されている。もう一つは哲学館講義録として、館内員佐村八郎が筆記した古代ギリシア哲学に関する講義録であり、一八九四（明治二七）年版の『古代哲学』が国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている。本ノートは英文原典からの抜粋ノートであるため記述が詳細である一方、講義録は内容がよく整理されており読みやすい。

（7）本ノートは縦書きの手稿である。ノートは罫線紙を綴じたものであり、頁番号は記されていない。そのため、ここでは便宜上、罫線のある最初の頁を第一頁として、以下順番に仮の頁番号を打ち【　】内にその数値を記した。白紙頁も含めて全部で一七八頁ある。例えば六頁と七頁は見開きで六頁が右に、七頁が左に位置するが、用紙自体は五頁と六頁で一枚をなし、それが山折りされて綴じられている。

・記述は罫線に即してなされているが、記述が行末で終わる場合、次に改行が意図されているのか否かは判断が難しい。その場合は翻刻者の主観で処理した。

・罫線の外（欄外）に注記がある場合、該当箇所ないしは各頁の末尾に［　］を付して記述した。

・［　］内は翻刻者による注記である。

・文中にある○印は円了が記した記号であり、判読不能を意味しない。

・本原稿は四百字詰めで一七二枚あり、本誌の字数規定に従えば少なくとも二回か三回の分載となる予定である。

なお、本研究は、日本学術振興会による研究助成（通称科研費）に基づく共同研究「西洋哲学の初期受容とそ

の展開――井上円了と清沢満之の東大時代未公開ノートの公開」（研究代表者：村山保史）の研究成果の一部である。

〔表紙〕
明治十七年六月
井上円了
古代哲学

〔【1】～【5】には記述なし〕
【6】三元論　唯物論、唯心論、二元論
哲学概論、宗教論、社会論
【7】History of Philosophy (by Henry) V.150
哲学史ヲ分テ五世期トス
第一、東洋哲学世期
印度、支那、比耳士亜〔ペルシア〕、Chaldea（カルデア）〔メソポタミア東部〕、フェニシア〔フェニキア〕、埃及〔エジプト〕ノ哲学ヲ合称スルナリ
第二、希臘哲学
「セールス」〔Thales, BC.c624-c546〕、「ペサゴラス」〔Pythagoras, BC.c570-496〕ヨリ始マリ「セキスタス、エム

ピリカス」〔Sextos ho Empeirikos, AD.2-3 C〕マデ伝ハリ紀元後百年代マテツゝキシ世期ヲ云フ

第三、紀元五百年間ノ哲学

此時限ニアリテハ純正ノ希臘哲学ハ地ヲ払ヘタリト雖モ二條ノ性質アリテ此時期ヲ成立セリ【8】

第一、東洋哲学ノ播布シテ希臘学ト混合シテ一種ノ性質ヲ変成シタルモノ

第二、耶蘇哲学ノ紀元及生長ヨリ影響セシモノ

第四、中世時期

此時耶蘇哲学分レテ二種トナル

第一種、東洋哲学ニ類同セシモノ

第二ハ、希臘哲学ノ基礎ニ拠ルモノ即チ「スコラスチシズム」是ナリ

耶蘇教範囲内ニ亜拉比亜哲学起ル

第五、近世哲学

「スコラチシスム」ニ継テ顕ハレタルモノ

紀元千四百年代十五世紀ニ始マリ、主トシテ以太利現ニ起ル現今【9】ニ伝ハルナリ

其三中央点ト称スヘキハ英仏独三国ナリ

右ハ全ク年月ノ前後ノミニヨルニアラス哲学思想ノ生長ノ順序ニ本ツク

右ノ世期ハ多少相関係連続セルモノトス最初ハ東洋学希臘ニ影響ヲ及ボシ次ニ希臘ハ独立シテ行ハレ次ニ二種羅馬ノトキニ和一シ耶蘇哲学モ此二者ヨリ其主義ヲトリテ補助トセリ

右三種ノ哲学相合シテ中世ニ及ホシ最後ニ近世学ヲ起ス即チ近世哲学ハ中世ニ胚胎スルナリ

○東洋哲学　第一世期

第一　発端　○東洋哲学中ニ二種ノ思想アリ一ハ太古ノ思想【10】ニシテ国々ニヨリテ多少ノ異同アルモ概スルニ同一ノ点ニ帰スヘシ即チ事物ノ初想直覚ニシテ思弁意力ヲ用ヰテ推理スルニアラサルモノニシテ之ヲ初発ノ思想ト称ス　次ニ種々ノ疑問起リテ思考研究理ヲ窮メテ思想ヲ発達スルモノヲ云フ之ヲ発達ノ哲学ト称ス要スルニ第一ハ直意力ニ帰シ第二ノ推理力ニ帰ス一ハ起原ニシテ一ハ生長ナリ

東洋哲学ニアリテハ支那、比耳士亜、埃及一三角形ノ三隅ヲ形成シ印度ハ其中央点ヲ占有スルニ似タリ故ニ只其各国ノ哲学ヲ知ラント欲セハ先ツ印度ニ拠ラサルヘカラス印度ハ東洋学ノ本点ナリ

［東洋哲学第一篇◎］

第二、印度哲学

発端○印度ハ「ケースト」（Caste）ヨリ成ル其中婆羅門ノ僧ヲ以テ第一ニ位ス（the Brahmins）其国ノ古書ハ「ベタス」（Vedas）ト名ケラレタル書ヲ以テ最モ旧シトス其字義ハ「サイーンス」［science］或ハ「ロー」［law］ノ義アリ其書分カテ四部【11】トナル或ハ詩ヨリ成リ又ハ文ヨリ成ル皆神ノ法式、礼拝、創造、神魂、魂神ノ関係等ヲ記セリ其後「ポラナス」（Porranas）ト名ケタル一書出テタリ其中ニハ宇宙開闢及ヒ人種ノ系図等ヲ論セリ其後種々ノ史類出テタリ the Ramayan, the Mahabharata 等ナリ

説明○「ブラム」［Brahm］即チ原始体（first substance）純一体（pure unity）ハ不生不滅ニシテ永久生存スルモノトス其理体タルヤ純一ノ理ニシテ差別ノ事相アルコトナシ差別ノ外相ハ即チ有休（ビーング）ナリ故ニ此理体ハ有体物体ノ内部ニ成立ス其中自ラ創造力ヲ有スト雖モ最初ハ之ヲ潜蔵シテ毫モ外ニ示サヽルヲ以テ睡息セリト云フ（此体ヲ即

チ創造神ト立ツルナリ）此神体睡息ヨリ醒起スルニ当リ其始ハ無差別ノ理体ニシテ男女陰陽ノ別ナキモ忽チ変シテ男性ノ婆羅門神（ブラマ）［婆羅門神 Brahma］トナリテ創造力ヲ発ス此神又光明トモナリ智慧トモナリ言説トモナレリ

【12】

「ブラム」ノ自体ヨリ三種ノモノ発生ス第一ハ創造神（ブラマ）［1. Brahma］第二ハ「ビチナ」［2. Vichnu］即チ形体ヲ保持スルモノ第三ハ「シーバ」［3. Seeva］形体ヲ破隤シテ原初ノ唯一ニ帰スルモノナリ此三種ノ発生セシハ（マヤ）［(Maya=matter)］即チ物質ノ生セシニ由ル蓋シ「ブラム」中ニ元来「スウハダ」(Swada or the golden womb)〔英訳21頁〕ナルモノアリテ現存アリ「ブラム」ノ「マヤ」ヲ生出スルニ当リテハ此子宮内ニ所有物形ノ模範ヲ含蔵セリ是ニ由リテ諸現象及ヒ諸箇体ノ現具スルニ至レリ「マヤ」ナルモノ始メハ流動シタル一元素ニシテ定リタル形相ヲ有セサルナリ其中ニ自ラ三種ノ性質ヲ有セリ即チ善徳、不純、不明ノ三ナリ［Trimourti 1. goodness 2. impurity 3. obscurity］

諸徳万物ノ模形ヲ含蔵スル「フラム」ノ純一理体ト「マヤ」ノ物質体ト混和シテ全体ノ創造ヲ生スルニ至ル然レトモ宇宙ハ二種ノ生発ヨリ起来ス一ハ細微ノ集合体一ハ粗雑集合体即チ精神【13】ト物質ノ二種ナリ此二種相合シテ生活体別シテ人体ヲ構成セリ其物二分シテ男女トナル

人意ハ流転スルモノニシテ種々ノ形体ヲ通過シ漸進シテ一大精神体即チ「アトマ」ニ合スルニ至ル宗教ハ他ナシ其目的上等ニ流転セシメ或ハ早ク精神大海ニ達スルヲ知ラシムルニアリ斯クシテ人意ナルモノ「アトマ」ノ精神海ニ和入スルヲ以テ成仏ト名ク印度諸学人意流転ヲ証セサルハナシ而シテ其ツトムル所直チニ流転ヲ階級ヲ経ズシテ成仏結果ヲ得ンコトヲツトムルナリ（釈迦ノ成仏ヲスゝムル此ニアリ）［1. Mahabhouta 2. Pradjapati Atma］

（愚案）（ブラム）ハ二種ノ元理ヨリ万物ヲ生スルニ至レリ其元理ハ物形ト物質（マヤ）ナリ物質ハ形ヲ有セサレトモ善悪ノ元種ヲ含有シ物形ハ物質ト合シテ物体ヲ成セリ此二者元ト（フラム）ノ理体中ヨリ発生スル也【14】

印度ニアリテハ正法〔orthodox〕ト外道〔heterodox〕ノ二種ヲ区別ス即チ「ベタス」ノ神典ニトキタルモノヲ信スルモノハ正法者トシ之ニ反スルモノハ外道トス然シテ又此二者ヲ折衷スルモノアリ〔英訳24頁〕

其書中ニ左ノ如キ格言アリ且之ヲ証明セリ

Brahma alone exists, every thing else is an illusion.〔英訳29頁〕

「ベタンチスト」〔Vedantists〕ハ「ブラマ」ヲ以テ長久純一無量無限ナルモノトス宇宙ニ種々ノ物体アルハ皆此神ヨリ生スルモノトス故ニ物体ノ元質原理ハ皆神ノ純体ノ中ニアリ

具曰ク人ノ心ニハ迷快ノ別アリ condition of sleep or dreaming

〃　　fine awake

「ブラマ」神ノ外ニ万物アリト確スルハ迷夢ナリ万物皆「フラマ」神ノ外ニナシト信スルハ快覚ノ時ナリ【15】

「ブラマ」ノ外ニ一物ナキヲ説明シテ此神ハ泥土ノ如ク自在ニ万物ノ諸形ヲ模造スルコトヲ得又火体ノ如ク諸光ヲ現ハシメ海水ノ如ク諸波ヲ顕ハス其体ノ一ニシテ其相ハ種々トナル是レ千態万状ノ万物ト顕ハルゝナリ

又之ヲ解釈シテ「ブラマ」神ハ無量無辺ノ人ノ如シ其頭ノ火トナル其目ハ日月トナリ其耳ハ天体ノ反響穹トナル其声ハ「ベタ」ノ発現トナリ其呼吸ハ風トナリ其心ハ万生物ノ生命トナリ其足ハ大地トナル（此ノ如キハ蓋シ「フラマ」ノ神力到ラサル所ナキヲ寓完シタルモノナラン）故ニ万物皆此神ノ変形ニシテ其名ハ皆其異名ナリ然レトモ此万物実ニ有リトスルハ迷夢ニシテ其名モ唯仮名ナルノミ

斯ク「フラマ」ノ真体ハ万象ノ動相ヲ隔テゝ生存スト雖モ其万象ハ皆「フラマ」ノ体中ヨリ生出スルモノナレハ

「ブラマ」ハ所造〔passive〕トモナリ能造〔active〕トモナル物相ヲ造出スル体ナルトキハ能造ナリ造出サレタル物相即チ神【16】体ナルトキハ所造トナル〔英訳30頁〕斯クシテ虚相ハ実体ヨリ顕ハレ幻象ハ真理ヨリ生シ漸ク進ンテ幻象愈々明詳ナルニ至ル印象ハ数ハ従テ増加シ其形状ハ従テ判然シ愈々詳細ニ渉ル之ヲ例スルニ「ブラマ」ヨリ光ヲ生シ光ヨリ水ヲ生シ水ヨリ土ヲ生ス（「バイフル」ノ云フ所ニ似タリ）〔英訳31頁〕然ルニ或人此幻象世界ニアリテ深ク思考ヲ運ラセハ種々ノ形相名称差別忽チ滅滅シテ不二ノ理体ニ帰ス其体タルヤ名相分別ノ差別更ニアルコトナク純一ノ理アルノミ能知者所知者皆此点ニ至リテ一体トナル此理ヲ覚知スル人ハ所有誤謬無知ノ蕃族ヲ脱シ諸罪諸惑皆遠離シテ純一ノ真理ニ帰ス何者真理ヨリミレハ差別ノ相一トシテ見サレハナリ然レドモ此ノ如ク真理ヲ醒覚シタル人ハ自由自在ナレトモ尚ホ其身ノ現存シタル間ハ前夢ヲ回想シテ未タ純然タル理想ニ合スル能ハズト雖モ死後ハ直チニ其迷想ヲ全ク絶離【17】シテ真理ノ一大海中ニ合体スルナリ之ヲ喩フルニ「ブラマ」ハ大海ノ如ク吾人ハ百川ノ如ク悟覚ノ暁ニハ古海ノ真理ニ合体シテ一トナルト云フ（仏教ノ真如ニ似タリ）〔英訳32頁〕

以上「ベタンチスト」ノ婆羅門神ヲ論スルハ万有神教（パンセイズム）ニ似タル所アリト雖モ其極霊興説陥ルノ弊ナキニアラス又論理上ヨリ見レハ幻想ト真理ト並存スル如クニトキテ如何シテ一者ノ他者ヨリ発生スルカヲ説明セサルカ如シ

以上第一論トシ Mimansa system ヲ論スルモノニテ「ベダス」ノ神説ヲ解スルナリ

次ニ第二論 Sankhya, Nyaya、組織ヲ論ス即チ一半ハ「ベタス」ノ神教ヲ用ヰ一半ハ之ヲ排スルモノナリ

論祖ハ「カビラ」［Kapila］ト称スルモノニテ婆羅門神ヨリ派生スル七大神ノ一人【18】ナリ

今此ニ其分派ノ図ヲ挙クルニ〔英訳34頁〕

印度哲学全系
- 正法（第一論）
  - 第一種 Mimansa（Vedas）
  - 第二種 Mimansa（Vyasa）
- 正邪混和（第二論）
  - Sankhya
    - Proper
    - Yoga
  - Nyaya
- 外道

第一種 Sankhya 此説ハ数ヲ義トセリ故ニ「ペサゴラス」ノ説ト類スルアリ然シナカラ其実大ニ異ナリ此説源ハ論究ヲ義トセリ蓋シ其主意トスル所生前或ハ生後ニ福祥ヲ求メンコトヲ論究スルニ由ル之レニ又形而上（メタフィズカル）ト論理（ロジカル）ノ二種アリ【19】其形以上三部初ニテハ第一ニ万物ノ原理第二ニ原理ヨリ生スル結果第三ハ万物ノ合成ナリ

第一原理

第一ハ万物ノ根元即チ Nature

第二ハ第一ヨリ生スル Intelligence

第三ハ第二ノ分ル因シタル Consciousness

第四～ハ　五種ノ極微分子第三ヨリ分来ス

第九～十九、十一ノ感覚及作用ノ機能（固リ第三ヨリ派生ス）

其中十ハ五感覚力ト五作用力ナリ

其他ノ一ハ右十力ヨリ生シタル知覚（feeling）

第二十～二十四　五元素（極微ヨリ形成スルモノ）

第一ハ空（体）［ethereal fluid］第二（空）気［風ノ如キ］第三火第四水第五地、【20】

第二十五　精神（ソール）（仏ノ識ナラン前ノ五元素ニ合スレハ地水火風空識トナルナラン）

以上合シテ二十五原理トナル宇宙ハ是ヨリ成ル但シ「ネーチューア」ノ自体ニ含有スル精神（ソール）ヨリ発開スルト云フ斯クシテ万物ノ創造アリ此造出ニ三種アリ第一ハ箇体ノ造出第二ハ体質ノ造出第三ハ智力ノ造出ナリ〔英訳36頁〕

此三種ノ造出ニヨリテ世界ヲ成立スルナリ第一ハ人々箇々ノ別相異ナルヲ分出スルモノ第二ハ其実体物質トナルモノ第三ハ智力ナリ

物質ニツキテ善悪ト混トノ三種アリ故ニ又天上ト地下中間ノ三界アリ中間ハ即チ人間ナリ善悪ノ物質ニヨリテ斯ク分ル此レハ物質ニモ精神ニモ作用スル也

万物ノ畢究点ハ成仏（サルベーション）ニアリ精神ノ万有万象ニ伝持サレタル間ハ成仏スル能ハス之ヲ脱離シテ万物ハ唯ゝ現象ノ虚形ナリ［Salvation　1. goodness　2. passion（中間人間ノ性質）　3. darkness］【21】ト観シテ其縛ヲ脱シタルトキハ成仏ナリ此ノ如キ自由ヲ得ルニハ先ツ第一ニ物界ヲ組成セル物質ノ執ヲ脱シテ諸感ノ機能ヤ五元素分子ニテ尽ク物相ナリト観セサルベカラス次ニ我執即チ吾人ヲ区別スル是ヲ捨テサルヘカラス第三ニハ其我執ヲ生スル智慧ヲ空セサルベカラズ斯ク万有ノ諸想ヲ空観シ原理ヲ快覚シタルトキ始メテ精神ノ自由ヲ得ルナリ

（愚案）仏ノ所謂ル我法ニ執ヲ空シ煩悩所智、二障ヲ断スルモノナルカ

其概念ニ曰ク Neither do I exist nor anything which pertains to myself.〔英訳39頁〕

自他ノ別ヲミルハ夢ナリ之ヲ去レハ真理現具スルナリ

次ニ論理学（カピラ）氏ニ従フ〔英訳40頁〕【22】論理学○（カピラ）ハ智識ニ三種ノ本源アルコトヲ論セリ

第一、感覚力。経験見聞ヨリ生スル智慧［1. perception］
第二、推論力。推測、論究ヨリ　〃　〃（「インダクション」ヲ云フ）［2. induction］
第三、以上ノ二力ニヨリテ生スヘカラサル智慧即チ示現力（レベレーション）［3. revalation］
帰納法ハ実験シタルモノヨリセザルモノニ及ボス也
「カピラ」ハ専ラ帰納法ヲ用ヰテ物心両体ヲ論究ス其他此法ニヨリテ因果ノ理ヲ論ス即チ果ハ常ニ因ノ中ニ含有セリト雖皆是レ例ヲ実験上ニ取リ以テ之ヲ明ス故ニ氏ノ説ニテハ宇内ノ諸物皆其源因中ニ含蓄スル意義ノ開発セシモノニ外ナラズ唯ゝ因ト果ノ異ナルハ因ハ定形ナシ果ハ定形アルナリ例ヘバ埴土ノ定形ナキモノヨリ陶器ノ定形アルモノヲ生スルカ如シ（然レトモ此帰納法ナルモノ直ノ帰納ニアラスシテ比較類因（アナロジ）ニ外ナラス）〔英訳41頁〕

【23】

右ノ法ヲ以テ精神ヲ明弁ス床カ楊ハ人ノ坐作スルモノナルカ如ク感覚憶緒ハ又他体ノ需用スルモノナルヘシ具体即チ精神ナリ又之ヲ見ルニハ我体内ニ之ヲ能視スルモノナクンバアルヘカラス是レ又精神ナリ又人タルモノ所有無常変易ノ物体ヲ遠離セント欲ス其能欲者即チ精神ナリ其精神ノ本体ハ自然力ノ造出スルモノニアラス本来自省サルモノトス又自体ヨリ他ヲ産出スルニモアラスト云フカ如シ

結論○二十五、原理ヲ唱フルコトアレトモ帰スル所ハ精神ト物質ノ二者ニ外ナラス其物質ニヨリテ現象スルモノハ反テ幻想ナレトモ其自体ハ諸現象ノ基礎本質トナルヘキモノナリ故ニ此派ノ論ハ物心二元論ナリ Sankhya 派ノ説ノ他説ニ異ナルハ他説ニテハ心体ヲ能造トシ物体ヲ所造トス然ルニ此説ニテハ物体ヲ能造トシ心体ヲ所造トス其外「カピラ」ノ説ニテハ物体［1. material nature］ヲ以テ純一体トシ心体［2. the soul］ヲ以テ却テ差別体ト

【24】スルアリ是レ又他説ニ反対スル所ナリ

右ノ点ハ全ク宗教ニ反対シタル点ニシテ外道邪法ニ属スル部分ナリ又「カビラ」ト宗教ノ理学ノ変切アルニ如カサルコトヲ論セリ

次ニ「バタンジャジー」ハ「カビラ」ト大同小異ナリ〔英訳44頁〕其異点ヲアクレハ此説ニテハ創造及支配主宰神ヲ設立ス其神体ハ一種ノ心霊（ソール）ニシテ衆人ノ心霊ニ異ナリ善悪苦楽患難ノ侵ス所ニアラス「カピラ」ハ天理（ネーチュール）ヲ本トスルヲ以テ創造神ヲ立テズ「パタンジャージー」[Pantandjali] ハ神ニ発因スルヲ本トシ「カピラ」ハ智識明瞭ヲ本トス（一ハ信仰ヲ本トシ二ハ道理ヲ本トス一ハ神ニ吾人ノ精神ノ救助ヲウケテ其体ニ原同センコトヲ欲シ一ハ物理ヲ究明シテ愚見ヲ開発シテ精神ヲ明瞭自由スルヲ本トスルナラン）

以上ハ印度哲学第二門即チ正法邪道混合門ノ第一種ニシテ Sankhya ト名ケタルモノナリ次ニ其第二種 Nyaya 部ヲ論ス【25】

第二部

Nyaya 哲学即チ理論（リゾーニング）哲学ノ開祖ハ「ゴタマ」ナリ「ベーセシカ」即チ個体哲学ノ元祖ハ「カナダ」ナリ [Nyaya Vaiseschika System　Gotama　Kanada]〔英訳45頁〕

「ゴータマ」ノ書ハ五部アリ

「ゴータマ」ノ学派ハ論理学（ロジック）ヨリ成ル「ベーセシカ」ハ物理学ヨリナルト云フケレトモ第二ハ第一種ヲ補助スルモノナリ

「ゴータマ」十六論理（カテゴリー）ヲ用ヰタリ之ヲ又三部ニ分テリ

証明法ヲ又四ツニ分ツ第一「ペルセプション」第二「インダクション」第三「ゴムパリソン」〔Comparison〕第四「アツフホルメーション」〔Affirmation〕ナリ〔英訳46頁〕

証明体ハ精神(ソール)ヲ以テ第一トス精神ノ本体ハ不生不滅ニシテ万物ノ原体トナルモノトス第二ヲ体(バーデー)トス第三ヲ感覚機能トス

「ゴータマ」ノ説ニテハ光線ハ眼ヨリ発シテ物ヲ射ルナリト云フ〔英訳48頁〕【26】

外感力ニヨリテ外物ヲ知リ内覚力ニヨリテ苦楽ヲ知ル

「カナダ」ハ六ノ「カテゴリー」ヲ立ツ其第一ヲ物質(サブスタンス)トス之レニ九種アリ地、水、光、気(エーア)、空(エーサル)、時、所、心(ソール)、識、ナリ物質ハ極微ヨリ成ルト云フ他ノ五「カテゴリー」ハ物質ノ性質及作用ヲアラハスニ過キス

「ゴータマ」ノ論理法ハ三礎ヲ以テ構成セリ第一ハ決定法、第二ハ論究法、第三ハ虚偽法ナリ

其推測式ヲ挙レハ〔英訳50頁〕

1. This mountain is burning.
2. For it smokes.
3. That which smokes burns, as the kitchen fire
4. Accordingly the mountain smokes
5. 〃 it burns【27】

結局○理学ハ印度ニアリテハ三部ニ分レリ〔英訳51頁〕命題、定義、究索、是レ「アリストートル」ノ論法ニ同シ其論理法ノ名辞ノ命題、推論是也「カナダ」ノ「カテゴリー」又「アリストートル」ニ似タルアリ

○「カナダ」ノ物理哲学ハ其基礎トスル所ノ極微分子誤タルヤ「エビキュラス」氏ノ説ニ異ナル所アリ「エピキュラス」氏ハ極微分子ハ形状ノミ差別アリト雖モ其本質ニ至リテハ同一ナリトス故ニ氏ハ宇宙体ヲ解釈スルニ器械的ノ理法即チ動力ノ理法ヲ用ヰ分子間ノ分合作用ヲ以テ成形ノ萬態ナル所以ヲ明セリ然ルニ「カナタ」ノ誤ニテ

ハ分子各々異リタル性質ヲ省シテ存セリ故ニ本質已ニ差別アリトス宛モ物相ノ萬差千別アルト同シ其他音響ハ音響分子ヨリ来リ光線ハ光線分子ヨリ来ルト云ヒテスベテ分子分散ノ力ニ帰シテ動力ノ理法ニヨラザルナリ〔英訳54頁〕【28】

「カナダ」ノ極微論ヲ以テ物界ノ現象ヲ釈明セシ中三点ノ当時ノ発見ニ偶発セシモノアリ

第一ハ重力ヲ以テ物体ノ墜降ノ源因トスルコト

第二ハ七種ノ元色アルコト黒色共ニ此中ニ差入スルハ今日ニ異ナルナリ

第三ハ音響ノ中点ヨリ次第ニ周囲ニ波動ニヨリテ漸及スルコト

第三論○邪教外道三部

「ジャイナス」及「ブシスツ」ノ論［1. Djainas　2. Buddhists］〔英訳55頁〕

此二派ハ唯〻哲学派ノミナラス一派ノ宗教ナリ全ク婆羅門正邪ヲ排破ス而シテ「ブシスト」ト婆羅門ハ最モ相敵視シ数年ノ争乱ヲ生セシ也「ジャナス」ハ案スルニ希臘学者ノ「ジムノソフィスト」［Gymnosophists］ノ名クルモノナラン

第一「ジャイナス」派ノ説【29】

第一説、宇宙ノ形成スルハ純一同類ノ極微分子ノ集積スルニアリ而シテ物ノ成立ニ千差万別アルハ唯其元素分子ノ集合異ナルニヨルノミ

第二説、有体（ビーイング）ハ有生無生ノ二種ニ分ツ

第三説、心霊（ソール）ハ快楽（エンシウイメント）ノ主（サブセクト）ニシテ無生物ハ其客（ヲブセクト）ナリ

第四説、有生物ハ不生滅(エトルナル)ナレトモ其体ヲ組成スル諸部ヨリ成ルヲ免レズ
第五説、〃　ハ地水火風ノ四種ノ元素ヨリ成ル其本質又分子ヨリ成ル
第六説、心霊ハ三種ノ事情アリテ生存ス（纒練、自在、完全、ナリ）
第七説、心霊ノ自在ヲ得ルニツイテ又障礙トナルモノ除クノ説（心霊ニハ又自体ノ作用活発ニシテ自体ヲ労スルカ如キハ纒練ナリ其苦業ヲ脱スルハ自在自由ナリ全ク之ヲ脱離シタルハ完全即チ仏ナラン）
第二「ブシスト」ノ説
「ブシスト」ノ学明ニ知ルアラサレトモ要スルニ三種ノ学派アリ皆陰道ナリ【30】
第一派ハ諸物皆空ナリ無体ナリ唯ゝ此ニ存スルモノハ心ノミナリ是レ反省力ニヨリテ知ルベシ其他ハ皆空ナリ故ニ唯心論又ハ唯念論ニ属ス
第二派ハ唯物又ハ唯覚論ナリ感覚ヲ本トシ而シテ外物アルヲ知ルハ推論(インダクション)ノ力ニ依ル此ニ又二派アリ第一ハ我人ノ外物ヲ知ルハ直覚力ニヨリテ其外物ノ分子元素ヨリ成ルヲ知ルハ推論ノ力ニヨルト云ヒ一派ハ外物ヲ知ルモ元素集成ヲ知ルモ皆推論ニヨル直チニ知ルハ外物ノ外相ヲ知ルノミニテ推論ノ法ニヨリテ其体ヲ知ルナリ唯ゝ此二派ノ一致スルハ外物ノ現象時々刻々変換スルモノニシテ其変換スルハ其体ヲ組成スル分子元素ノ分合集散ノ変互アルニヨル故ニ其分子ノ自体ヲ復スレハ不易不変ナリ
第三派自体(セルフ)自質ノ外真ニ生存スルモノナシ外物ハ仮現象ニシテ自体ノミ永存スルナリ其自体ノ内ヨリ諸現象ヲ生出スルナリ之ヲ「インジビジュアル、パンセーズム」ト名ク【31】
「ブシスト」ノ論スル所心物両界ノ諸現象ハ皆因果ノ関係連続ヨリ成リテ全ク智力ノ左右スヘキモノニアラズ故ニ其目的トスル所即チ成仏転迷ハ知力ヲ断滅シ思想ヲ絶無スルニアリ（小乗ノ涅槃ニシテ所謂化身滅智ナリ）

「ブシスト」ノ論最モ近世欧州哲学ニ似同スルアリ第一派ハ「ベルキュリー〔Berkeley〕」ノ唯心論ニ似タリ第二派ハ「カバニス〔Cabanis〕」等ノ唯物論又ハ唯覚論ニ似タリ第三派ハ日耳曼「フィフテー〔Fichte〕」ノ自己絶対ニ似タリ〔英訳58頁〕

印度哲学総説

印度哲学ハ正邪ノ二法ニ区別スルコトヲ得其諸派ニ共通ナル点ヲアクレハ第一ニ一箇ノ不生滅ナル物質（サブスタンス）アリ其諸形諸象ニヨリテ世界ノ全体ヲ組成ス第二ニ流出ノ理流出トハ造出ニ反対シテ無ヨリ有ヲ生スルニアラス因ノ中ニ果ヲ含有シタルモノゝ流現スルヲ云フ

［1. emanation＝流出　2. creation＝造出］［（耶蘇ハ造出教　仏ハ流出教ナリ）］第三、物体（マッター）是ニ由テ【32】自他各国ノ生存アルナリ然レトモ其現具スル物象ハ外相ニ止マリテ真ニ生立スルモノニアラズ真ニ生立スルハ其外相ノ起源トナルヘキ根本体ヲ云フ

第四、印度哲学ノ進化及溶化ノ理ハ因源中ニ含包スルモノゝ発展流出シテ其極度ニ達スレハ進化ノ満期ニシテ忽チ溶化ニ転スルナリ〔英訳60頁〕故ニ始メハ単純ノ物質愈ゝ造化発達シテ万象ヲ現出シ次ニ退歩却行シテ単純ノ物質ニ復帰ス然ルトキニ婆羅門神ノ睡息復タ起ル即チ世界創造ノ初期ニ帰ス第五此ノ如ク万物ハ物質ノ一物ニ転化シ心霊ハ万有（ネーチユーア）ト脱離シタルヲ以テ休楽福祥ノ極度トス第六斯ク無一物無差別ノ境ニ達スルヲ以テ人間ノ極度トナスモ其点ニ達スル迄ハ作用力ノ助ケナクンハアルベカラス其力ニヨリテ始メテ無作用ノ完点ニ達シ人々無労無苦無思慮ノ境ニナルナリ故ニ作用力ハ唯ゝ無作用ノ点ニ達スルノ方便ニ過キスト立ツルナリ之ヲ要スルニ印度哲学ノ要所ハ純一【33】無差別ノ真理ハ差別ノ万境ノ主本トナリ之ヲ左右スルノミナラス其万境ヲ空スルニ至ル

此傾向アルハ「カピラ」ノ如キ心物二元論者モ其極点ニ至リテ之ヲ見レハ諸象ヲ空亡シテ無物ト観スルニ至ル故ニ其格言ニ Neither myself nor anything belonging to me, exists〔英訳61頁〕其ノ如ク諸派大ニ一致スル点多シト雖モ亦大ニ異ナル所少カラス

今万物ノ起源ヲ論スルニ当リ三説ノ分ルヽアリ第一ハ万有神教(パンセーズム)即チ万象異相ハスヘテ一物質ノ変相ナリト立ツルナリ第二、二元論万物宇宙ヲ心物二大元素ニ帰スルナリ第三唯物論ト無神論ハ独一神ヲ立テズシテ極微分子ヲ以テ元素ト定ムルナリ此三説ハ印度哲学中ニ生長セシナリ即チ

The Vedanta School = Pantheism

The Sankhya 〃 = Analists【34】

The Kanada = Materialism

第一「ヴタンチスト」ニテハ万物万境ヲスヘテ幻想ト見做シ神智神力ノミヲ以テ真理トスルノ弊アリ〔英訳62頁〕之レニ反シテ「カピラ」及ヒ「カナダ」ハ他端ノ極ニ走ルノ僻アリ何者知覚ノミヲ取レハナリ第三ノ「サンクヤ」ハ感覚ト思想ノ二者ヲ想定ス即チ物心二元ヲ定立シテ前二派ヲ調和折衷スルモノヽ如シ此ノ如ク近世哲学ノ原理已ニ印度ニ胚胎セリト雖モ其全成完立セシハ近世学ニヨルナリ［「ヴタス［Vedas］」ノ神典ニ従フヲ「オルソトクス」トス是即チ婆羅門ノ本教ナリ］

印度哲学流系
- 1. Orthodox
  - 1. Mimansa, called Pourva
  - 2. Mimansa, ,, (Vgasa 人名) Vedanta
- 2. half orthodox
  - 1. Sankha
    - Sankha-proper
    - Yoga
  - 2. Ngaya
    - Proper
    - Vaiseshika
- 3. heterodo
  - 1. Djainas
  - 2. Buddhas【35】

東洋哲学　第二篇〔英訳64頁〕

支那哲学

支那ノ旧地経典ヨリ先ナルハナシ易経即チ其一ナリ伏羲氏ヨリ遺伝スルモノニシテ周祖文王武王之ヲ校正シ孔子之ヲ修正シテ今日ニ伝ハレリ

太極ヲ本トシ是レヨリ天地分ル是ヨリ万物生ス〔英訳65頁〕

人ハ魂ト魄ヨリ成ル死スルトキ魄ハ地ニ帰シ魂ニ天ニ帰ス魂ハ人始メ天ヨリ承ケテ生ルゝナリ人ノ天理ニ従フヘキモノトス易ハスヘテ天象ノ変化ニカタムケテ作レリ

以上ハ易ノ哲学ナリ

太極ハ即チ理トナリ道トナリテ吾人ノ心ニワタル

易ノ外ニ詩経書経ノ二書アリ【36】

支那哲学ハ印度哲学ニ始スト雖モ紀元前五六百年代ニ於テ「メタフィジカル」ト「モーラル」ノ二哲学盛カ〔ン〕ニ行ワル〔英訳69頁〕

書｛易経ハ「メタフィジカル」及「コスモロシカル」ナリ
　　詩書二経ハ「エシカル」ナリ

学｛老子派ハ「メタフィシカル」ナリ
　　孔子派ハ「エシカル」ナリ

第一老荘学派

老教ト希臘学ノ比較○老教ハ「プラト」及ヒ「ストイック」哲学ノ如ク道（リーソーン）［reason］ヲ以テ原理トス其体ノ言説ノ外ニアリ天地自然ノ理ナリ道ヨリ天地生スルヲ以テ道ハ天地ノ母ナリ之ヲ写シテ道ト云フ〔英訳71頁〕

又「ピサゴラス」氏ノ如ク万物ヲ壱個ノ「モナッド」［monad］ヨリ発スルモノトス【37】

道一ヲ生シ一二ヲ生シ二三ヲ生等泰一ヲ以テ万物ノ本根トス又「プラトー」ノ如ク世界ヤ人ハ神形神客ニ擬倣シテ自発スルナリ道天地王ノ四大要アリテ人ノ形相ハ地ニヨリ地ハ天天ハ道道ハ自体ニヨリテ生存スルニ至ルト云フ

「ピサゴラス」及他ノ一二ノ希臘学者ノ如ク心霊ヲ以テ「エサール」ノ発展シタル如ク信ス人死スレハ本ノ「エーサル」ニ帰ス又「プラトー」ノ如ク悪心ノモノハ死スルモ精神界ニ帰同スル能ハス「サラスト」［Sallust］ノ如ク物心二者ノ相関係スルハ其間気アルヲ以テナリ（即チ生気ナリ）〔英訳72頁〕

第二孔子学〔英訳74頁〕

孔子ハ紀元前五百五十一年ニ生ル同四百七十九年ニ死ス

孔家ノ一種ノ性質タルヤ眷魔法ヲ以テ国家法トスルニアリ是レ孔子道徳学ノ一大欠典ナリ是ヲ以テ支那人ハ自己主義【38】ノ改進スルナク唯ゝ因循退歩スルニ至レリ支那ノ不幸ト云フヘシ〔英訳81頁〕

其学タル秩序ヲ重ンジ従順ヲ主トシテ自己独立自由ノ気ヲ養ハズ希臘学ノ影響ハ全ク之レニ反ス

孟子ハ「ソクラチース」学ニ似タリト云フモアリ其大ニ孔子ニ異ナルハ正義ヲ本トシテ従順ヲ主トセズ大ニ臣民ノ自由ヲ主張スルカ如シ〔英訳82頁〕

紀元後一千二百年代ニ於テハ一派ノ哲学起リ「マテリヤル、パンセスム」ノ一種ナリ極メテ不完全ナル虚想ノ物理ヲ用ヰテ万物ノ解釈ヲ下セリ【39】

東洋哲学第三篇〔英訳83頁〕

比耳士亜〔ペルシア〕哲学

比耳士亜ノ旧記ハ「ゼンダベスター」[Zendavesta]ト称スル書中ニアリ「ゾロスター」[Zoroaster]ノ作ル所トナス其目的トスル所拝星ヲ以テ宗教トスルカ如キ愚民ニ天神世界(スピリチユール)ノ現存スルノ理ヲ知ラシメン為メナリ

○此書分ツテ二部トナス一部ハ礼法儀式等ヲ有シ一部ハ「コスモロジー」〔原典では cosmogony「宇宙創成説」〕ヲ説キテ神人ノ関係等ヲ明セリ

趣意○原始ニ方リテハ時(タイム)アリテ存セリ是時ニヨリテハ万物一体ニ帰無差別ナリ之レヨリ物ノ生スルアリ而シテ此ニ印度学ト異ナルハ比耳士亜ニテハ神ヲ以テ完全ノ体トシ印度ハ完全体ノ一部トスルカ如シ且ツ理想ヲ論スルニ当リテハ比耳士亜人ハ印度ヨリ浅小ナリ

時承久(タイムエトナル)ノ体ヨリ「オルムツヅ」[Ormuzd]ト名クル最上ノ純体（意）ヲ生ス光(ライト)ノ【40】原体トナル又時ヨリ悪神即チ「アリマン」[Ahriman]ト名クルモノヲ生ス闇黒ヲ主トシ諸悪ノ本源トナル〔英訳85頁〕

又一説ニハ「オルムツヅ」ハ心霊ニシテ「アリマン」ハ物性ナリト云フ

此二種ノ原性ヨリ宇宙ノ形成アリ二性ノ生スル所善悪明闇全ク相反シタルモノナリ是レ互ニ相ヒ争抗スルニ由ル

「オルムツヅ」ハ有機体ノ原力ヲ包有スル一個ノ牡牛ヲ作ル然ルニ「アリマン」之ヲ到傷セリ牡牛死スルニ及テ是体ヨリ動植物尽ク発生セリ之ニ反シテ「アリマン」ハ有害ノ禽獣草木ヲ作ル善種善性ハ「オルムツヅ」ノ作ル所悪種ノスベテ「アリマン」ノ作ル所ナリ善神所造ノ牡牛ノ体ヨリ「カイオモルト」[Kaiomort]ト名ケタル人発セリ然ルニ悪神「アリマン」之ヲ殺セリ忽チ其遺血ヨリ男女ノ二人発生スルニ至ル之ヲ人祖トス其人遂ニ悪神ノスゝメニヨリテ【41】悪神所造ノ物（両蹄）ヲ礼拝スルニ至ル

斯クシテ両神ノ争闘ヨリ人類中ニモ善悪ノ変常ニ止サルニ至ル然レトモ人タルモノゝ目的トスル所ハ悪神ノ要スル所ノ悪ヲ矯メ非ヲ除キ善神ノ徳ヲ本トシテツトメサルヘカラズ

要スルニ悪善両神此二原理ヨリ宇宙ノ生スルナリ

哲学上ヨリ之ヲミレハ比ト印トハ全ク相反スルナリ〔英訳87頁〕印度ノ創造ハ純一ノ理想ニ帰シ比耳士亜ハ二種ノ反対シタル理ニ帰スルニ然レトモ全ク純一体ナキニアラス最初ニ訴レハ純一ノ時ヨリ生シ其極末モ亦純一ノ善ニ復化スルヲ目的トス

然レトモ別シテ其悪神悪理ノ生セシカ証明セサルカ如シ且ツ哲学成長ノ世期詳ナラス

「マージ」[magi]ノ比耳士亜ニ於ケル「ブラマ」ノ印度ニオケルカ如シト云フ〔英訳88頁〕【42】

東洋第四〔英訳89頁〕

埃及哲学

埃及ノ哲学ハ「エシオピヤ」[Ethiopia]ヨリ来ルト云フアリ

埃及ノ哲学ニアリテハ万物ノ未タ生セサルトキニ無名ノ神ノ存スルモノトス〔英訳90頁〕其体タル初発未明ナレトモ其中ニ自ラ万有生立ノ原種ヲ含有シ諸生ノ原力ヲ蓄包セリ之ヲ写シテ「ピロミス」[Piromis]ト名ク最上ノ神ノ義ナリ此神創造者トナリ始メニ「ネフ」[Kneph]ヲ発生ス万物ノ実理トナルモノ次ニ「フタ」[Phta]ヲ発顕ス宇宙ノ構成及生活ノ原力トナルモノ次ニ「フタ」ト「オシリス」ノ間ニ二三ノ現具スルアリ其中ニ「ブトー」[Butos]或ハ「アサイル」[Athyr]ト称スルモノアリ即チ闇黒ヲ表スルモノニシテ原物質即チ水ト同性ナリ次ニ宇宙ヲ組成スル二大要素トモ称スヘキ二理即チ二神力発顕ス之ヲ「オシリス」【43】及ヒ「イシス」[Osiris & Isis]ト云フ〔英訳91頁〕第一「オシリス」ハ宇宙ノ能作用明理ニシテ第二ノ「イシス」ハ所作用ノ暗質ナリ一ハ光ナリ一ハ影ナリ一ハ父ナリ一ハ母ナリ一ハ心ナリ一ハ物ナリ此二神ノ交婚ニヨリテ世界ノ万物発生セリ一ハ日ナリ一ハ月ナリ（我開闢史ノ諸冊二神ト同シ蓋シ天地割判ノ理ヲ神体ニ帰セルナラン）斯クシテ二神発顕シテ其他ノ属神尽ク生出ス

右ハ世界造出進化ノ順序ノミニテ之ニ反対スル滅無破壊ヲ生スル理ナクンハアルベカラス善ニ対シテ悪順ニ対シテ逆生ニ対シテ死ナクンハアルベカラス凡テ悪凶ノ源因トナルハ「テーフォン」[Typhon]ナリ此神ノ起源詳カナラスト雖モ其母ハ「アサイル」ナラン此悪神終ニ「ネフセース」[Nephthys]即チ善神ト混合シテ善悪ノ混合物ヲ生ス之ヲ世界ノ原理トス〔英訳92頁〕之ヲ要スルニ宇宙創造ハ第一能作用即チ心【44】所作用即チ物ノ二種ヨリ起ルナリ

埃及ノ史未タ明瞭ナラサレハ哲学思想等進化セシカヲ知ル能ワズ〔英訳93頁〕

東洋第五〔英訳94頁〕

「カルデア」[Chaldea] 哲学

此国ニ於テハ理学社会ト宗教社会組成アリテ盛ニ相争抗セシコトアリ

開闢ノ始メニ当リテハ万物ノ原始ナル神ト暗黒ニシテ水ノミヲ含ミタル混沌タル一塊ト巨大ノ諸塊ト「オモルカ」[Omorca] ト名ケラレタル婦人中ニ含ミタル天然理（ネーチュール）トアリシニ神ハ混沌ノ塊中ニアリテ婦人ノ自体ヲ分判シ其一半ヲ分ケテ天地ノ二素ヲ排置ス〔英訳95頁〕【45】

次ニ光明ヲ発生シテ諸怪光ヲ遂除シテ万物ノ順序ヲ整置ス最後ニ神自身ノ血ヲトリ又ハ地ト混シタル賤神ノ血ヲトリテ人獣ノ精神心霊ヲ創出ス而シテ有形物体ハスヘテ「オモルカ」[Omorca] ト名クル即物質本体ヨリ生ス斯クシテ宇宙発顕セシナリ

此哲学ノ印度及比耳士亜ニ異ナルハ印度ハ唯〻唯念論ノ傾向アリ比耳士亜ハ心物両界ヲ別立スルノ傾向アリト雖モ二国昔ニ心ヲ本トシ物ヲ本トスルカ如シ然ルニ「カルデヤ」哲学ニアリテハ独リ物ノミヲトリ心ハ物ニ帰スルナリ所謂唯物論ノ本源トモナルヘキ傾向アリ〔英訳96頁〕

Indian = Metaphysics, ideal, philosophy

Chaldean = philosophical or empirical 〃 【46】

東洋第六

「フェニシヤ」国哲学

「トロジャン」〔Troia〕戦争ニ先チテ世ニ著レタル「フェニシヤ」記者ノ記シタル書中ニツイテ宇宙論〔原典はcosmogony「宇宙創成説」〕ヲ見ルニ全ク物理法ニヨリテ宙宇生来ノ源因ヲ解明スルカ如シ然レトモ其中自ラ唯神唯心ノ痕跡ナキニアラス希臘史家ノ論スル所ニヨルニ「フェニシヤ」人ノ論スル所希臘学者ノ論スル所ニ同キモノ多シ極微分子ノ集合ニヨリテ宇宙ノ構成アルト云フ一論ノ如キハ「フェニシヤ」人ノ前已ニ唱フル所ナリ物理上宇宙創造ヲ論スルカ如キハ其源西亜細亜地方ニ発シタルナレトモ「フェニシア」人ニヨリテ大ニ其説ノ流行スルニ至リシナラン

以上第一世期【47】

哲学史　第二世期〔英訳98頁〕

○希臘哲学

発端○希臘ノ文明東方ヨリ漸入シタルハ疑ヲ入レス其漸入シタルヤ重ニ三方ヨリセリ即チ

1. Orpheus, from Thrace
2. Pheroneus,　,,　Egypt
3. Cadmus,　,,　Phoenicia

此三種ノ元素混和シテ一種ノ希臘哲学ヲ構成セシハ明也希臘哲学ヲ分チテ二大期トシ第二期ハ思弁研究ノ世ニシテ希臘固有ノ新哲学ヲ発達セシ時ナリ其前ニ一時期アリテ第二期ノ元素ヲ石礎成スル時アリ之ヲ第一期トス【48】

此第一期亦二派ニ分レ第一派ハ全ク神学ノ世ニシテ其学尽ク東洋ヨリ来ルモノニテ希臘ノ新見未タ発セサル時ナリ次ニハ神学ノ衰頽シテ道義学ノ起リシナリ此時僧侶ト軍人トノ間ニ争闘ヲ生シ終ニ僧侶敗ヲ取リ大ニ其勢ヲ失ヒタルヲ以テ神学ノ世想ヲ離レテ一種ノ道義学ノ作ルニ至レリ之ヲ第二派トス此時 Solon, Chilon, Pittacus, Bias, Cleobulus, Periander 等ノ七賢人起レリ〔英訳99頁〕

希臘哲学
- 第一期
  - 第一派 Oriental philosophy by the nature of Orpheus
  - 第二派 ethical Doctrine by Philosophical Heptad
- 第二期 Begins with Thales & Pythagoras

第一期ノ第二派ニ於テハ未タ理学ノ基礎ナリ思弁研究ノ道【49】未タ開ケス第二期ニ至リテハ始メテ哲学ノ新見ヲ起シ研究ノ道発達スルニ至レリ即チ「セールス」〔Thales, BC.c624–c546〕出テゝ一派ヲ開キ尋テ「ペサコラス」〔Pythagoras, BC.c570–?〕一派ヲ起スヨリ始マレリ「セールス」派ヲ Ionic school ト称シ「ペサコラス」派ヲ Italic School ト称ス

斯クシテ希臘哲学進歩スルニ其進歩ヲ概シテ二大級ニ分ツ

第一級ハ extends from Thales to Socrates

第二級ハ　〃　〃　Socrates　〃　Sextus Empiricus

第一級亦三階ニ分ツ

第一階　The Ionic & Italic School

第二〃　The two Eleatic Schools with the systems of Heraclitus & Empedocles

第三〃　The School of the Sophists

○第二期第一級第一階「アイオニック」学派〔英訳100頁〕【50】

「セールス」ハ紀元年〔「紀元前」の誤記〕六百年頃ニ生レ其家元ト「フェニシヤ」ヨリ来ル「エジプト」及ヒ「フェニシヤ」ニ遊歴シテ其地ノ学風ヲ学ヒ終ニ「アイヲニック」学派ヲ組成セリ「セールス」ニツイテ其派ヲ伝フルモノ

Anaximander, Anaximenes, & Anaxagoras ナリ

此学派ノ学風タルヤ（推理法）帰納法ヲ用ヰテ人智経験内ノ宇宙ノ現象ヲ観察シテ宇宙一般ノ原理理法ヲ論定セントスルニアリ〔英訳101頁〕

「セールス」ノ観察スル所ニ従ヘハ二種ノ原理生存スルモノトス第一ハ物質（マッター）第二ハ精神（ソール）ナリ経験上ヨリミレハ万物ノ創造アルニハ其始不生不滅ノ原質タル物体ナクンハアルベカラス其体タル固ヨリ形相ヲ有スルニアラス流動シタルモノナラン是ニ於テ水ヲ以テ万物創出ノ原質トス次ニ経験上宇宙間ニ無形無色ノ動力【51】活力生力智力ノ如キモノナクンハアルヘカラス其本質ヲ心霊（ソール）トス而シテ有形ノ物質ノ起源ハ水ナリ無形ノ精神ノ起源ハ神、ナリト論決スルニ至ル此心力物質上ニ作用ヲ及ホシ宇宙万物ノ他生スルニ至ルナリ斯クシテ「セールス」ハ比耳士亜哲学ノ如ク二元論ヲ以テ宇宙構成ヲ論スレトモ二者ノ説異同アリ比耳士亜ニテハ二元全相抗排争抵スルモノト信ス「セールス」ハ二者互ニ相持属スルモノトス物若シ心ヲ離レハ其相（フォーム）ヲ現スル能ハス心若シ物ニヨラスレハ其体（マター）ヲ顕ハス能ハズ二者相待ツテ宇宙万物アルナリ〔英訳102頁〕

次ニ出テヽ「アイオニック」学ヲ伝フルモノヲ「アナキマンデル」〔Anaximandros, BC.c610-c540〕ト云フ氏ノ説「セールス」ニ異ナルハ哲学界ニハ神ヲ立ツルコトヲ要セズ神ヲ立ツルハ哲学ノ本意ニアラスト信シ師主ノ説ヲ排棄シテ全ク物理ノ説明ヲ下スニ至レリ「セールス」ハ水体ヲ以テ原質ト定ムレトモ【52】「アナキマンテル」ハ

水ハ猶ホ多少ノ形相ヲ有スルヲ以テ原質トナスヘカラス故ニ原理ハ無形無相ノ物体ヲ用ヰサルベカラス因テ無限ノ空間(スペース)ノ如キ絶対本理ヲ以テ万物ノ本源ト定ム然レトモ其原理ヨリ始向シテ万物ノ発生セシカハ氏ノ論スル所明詳ナラサレハ知ル能ハス

次ニ「アナキメニス」〔Anaximenes, BC. 6 C〕ハ「アナキマンデル」ノ原理至テ絶対無物ニ渉ルヲ以テ解明シ難キヲ察シテ一歩ヲ退キテ又有相物理ヲ以テ源質ヲ立ツルニ至ル其体ハ即チ空気ナリト云フ是レ蓋シ「セールス」ノ水ハ有形ニ過キ「アナキマンテル」ノ抽象無限ハ無形ニ過キルヲ察シテ二者ヲ折衷シテ其間ヲトルモノナリ是ニ至テ尚ホ解明シ難キハ空気ノ如キ同一質(ホモセニオース)ノモノ如何シテ異質ノ万物ヲ形成スヘキカニアリ〔英訳104頁〕【53】

以上ノ難点アルヲミテ次ニ出テタル「アナキザコラス」氏ハ又学祖「セールス」ノ二元論ニ帰シ心物二体ヲ考定スルニ至ル氏ハ神ノ思想ヲ再考シテ明ニ物神二体ノ作用ノ異ナルヲ説キ物質ニモ毫モ内力アルナリ其運動作用アルハ皆生力心力之ヲ帰スレハ神力ノ存スルニヨル其神ナルモノハ絶対純全ナルモノトス蓋シ神学ノ基礎ヲ哲学上ニ開キタルハ氏ノ説ヲ始メトスト云ヘリ氏ハ又物質ノ原理ヲ考定シテ物体ハ混合体ニシテ他ノモノヨリ組成サレタリト云フノ考アリ終ニ元素ヨリ成ルノ想像ヲ起スニ至ル其元素ノ性質各々異同ナキニアラサルモ異同アル物質中ニ同質ノ元素アルヘキヲ知レリ是レ已ニ印度哲学中ノ「カナダ」ノ学ニ論スル所ナリ斯クシテ氏ノ説ハ万象ハスヘテ諸元素ノ集合ヨリ結果スルナリト思ヘリ【54】

「アイオニック」哲学タルヤ倫理(モラル)上ヨリ宇宙万物ヲ論スルニアラスシテ物理上ヨリ之ヲ論スルナリ

「セールス」ト「アナキサゴラス」ハ帰スル所同一ナリト雖モ「アナキサゴラス」ニヨリテ「セールス」ノ心神ノ説モ原質ノ説モ大ニ発達シテ新見ヲ添ヘタリ其他「アイオニック」学ハ帰納法ニヨルノ傾向アリテ諸実事ヲ帰納シテ一理一法ヲ究索スルアリ

○第一階第二派「イタリック」哲学〔英訳 106 頁〕

此学祖ハ「ペサコラス」氏ニシテ紀元前六百年代ノ末期ニ生シタルナラン南部以太利ノ希臘殖民地ニ於テ一種ノ哲学ヲ起ス氏ハ始メ埃及及巴比倫等ニ遊ヒ遠ク印度地方マテ到リシト云フ氏ハ哲学者ニテ一家ノ主祖トナリ又立法家ナリ【55】

氏ノ哲学ハ至テ了解シ難ク一々之ヲ論スル能ハス其論多クハ記号(シンボル)ヲ以テ表シ其何ノ義タルヲ知ルニ由ナシ別シテ其数理説ノ如キ(Theory of Number)皆人ノ解スルニ苦ム所ナリ故ニ我今論セントスル所ハ唯〻其論ノ基礎トナル所如何「アイヲニク」派ト異ナルカヲ明スニアリ

二派異ナル点ヲアクレハ

第一「セールス」ノ元理ト「ペサコラス」ノ元点ハ全ク相反ス

第二論法又全ク相反ス

「セールス」ハ帰納法ニヨリ

「ペサコラス」ハ演繹法ニヨル

「ペサコラス」、事物ヲ論スル後ニ其理ヲ絶対唯一(アブソリュユニテー)ニ帰ス〔英訳 107 頁〕其中ニ万物ヲ合セリ此原体ヲ名ケテ「モナッド」[monad] ト云フ神ト云フカ【56】如シ

「モナッド」ノ中ニハ心物ノ本ヲ合蔵ス二者其中ニアリテハ自他ノ別ナク和合体ナリ（此辺起信ノ一心ニ同似タリ）

唯一ヨリ万差ヲ生ス万差即チ宇宙ナリ是即チ神ノ唯一体中ヨリ発生分岐スルナリ

神体即チ「モナッド」ヨリ生シタル物質ハ「ダイヤド」[Dyad] ト名ク「ダイヤド」ハ不完全変化、不規則等ノ原

理トナル故ニ神体ヨリ生シタル有心物ハ「ダイヤド」ノ物質中ニ包縛ヲ受ケルヲ以テ不完全不常住ノ物ノナル夫ヨリスベテ不完全ナルモノハ心物ヲ論セズ是ヲ「タイヤド」ト総称ス（「ダイヤド」ハ諸惑狭隔ノ根本ニシテ無明ノ如キカ）

進化ノ目的ハ精神ヲシテ「ダイヤト」ノ包縛ヲ脱離スルニ【57】アリ故ニ智力意志ハ此束縛ヲ脱センコトヲツトメサルヘカラス世界ノ諸象ハスベテ幻相ナリト云フ唯〻智力ヨリ此幻相ヲ破シテ真理ヲ開クコトヲウルナリ（本意ノ内重力カ）〔英訳108頁〕

学問ノ目的ハ即チ万差ノ幻象ヲ脱シテ唯一ノ真理ニ帰セシタルニアリ此唯一ノ点ニ達スレハ心ハ全ク「タイヤド」ノ縛ヲ脱スルナリ

人ノ意志ハ願欲ノ情アルニヨリテ「ダイヤト」ノ懐中ニアリ其欲スル物ハ万事幻相ナリ故ニ遺志ハ幻相ノ欲ヲ離レテ自由自在ノ境界ニ入ラサルヘカラス

意志ノ目的ハ虚妄ノ欲念ヲ断スルニアリ

知力ノ　〃　万差ノ迷執ヲ破スルニアリ

之ヲナスニハ戒律観法ヲ要スルナリ（fasting & abstinence）〔英訳109頁〕【58】

諸学ノ理皆此ニ本ツク之ヲ社会ニ用レハ政治学トナルナリ人ノ心霊ノ「ダイヤト」（煩悩ナラン）ノ纏縛ヲ受クル至テ強密ニシテ一世間ニ之ヲ脱去スル能ハス故ニ数世転生シテ之ヲ脱セサルヘカラス若シ心中ニ悪学悪法ヲトレハ次世ニハ愈々悪粗ノ身体ヲ得テ生レ心若シ純明ナレハ愈ノ高等ノ体ニ転生スルナリ其成仏極点ハ全ク「タイヤド」ノ縛ヲ脱シテ純一ノ神体ニ化生スルニアリ之ヲ「ペサゴラス」哲学ノ本旨トス其印度哲学ニ似同スルハ言ヲ待ズ

「チーミユース」［Timaeus］ト称スル一書ハ世界ノ精神（the Soul of the world）ヲ論ジタルモノナリ〔英訳 110 頁〕其作者ハ「ピサゴラス」ナリト云フ其書中ニハ宇宙ハ一体ノモノヨリ成ル其心理ハ神ニシテ其構成ハ物質ナリトシリ此説ニヨレハ二元論ナレトモ其二元ハ比耳士亜学及【59】「アオイニック」学派ノ論トハ異ナリ心物固ヨリ別体アルニアラス共ニ物ノ二元トスルノミ故ニ二者ノ体ハ唯〻唯一ノ一理体ニ外ナラスト云フ

又宇宙ノ本質実体ハ不生不滅無始終トス其外相ヲ組成スルモノハ終始生滅アルナリ

結局○「アイオニック」学ハ物理（フイジカル）哲学ニシテ「イタリック」学ハ心理（モラル）哲学ニ属スルカ如シ天地万物ハ変易ノモノニ関係シ思想ハ不変ノ体ニ関シ諸学諸理ノ唯一体ニ帰スルノ理ヲ論セレハ此学派ノ切ナリ而シテ又感覚ト思想ヲ分チ感覚ヲシテ心性ニ付属スルモノトセリ

又「ピラコラス」ノ宇宙ヲ唯一体ノ外相ト観スルハ「パンセースム」〔pantheism〕ニ属スルカ如シ【60】

両学派ヲ総括スルニ三種ノ僻論ニ配スルコトヲ得〔英訳 111 頁〕

1. Dualism = the philosophy of Thales & Anaxagoras
2. The germ of Atheism = 〃 of Anaximander & Anaximenes
3. Pantheism = that of the Pythagorian School

二派ノ結果

1. Ionian takes sensation as its starting point & lastly denies the spiritual world.
   So it is the root of Sensualism or Matherialism
2. Italian takes ideas as the starting point & considerts〔原典英訳は considered〕
   sensations as illusive, & denes the material worlds it is the foundation of Idealism

次ニ Eleatic Schools 起リテ此二派ノ説ヲ発達進長セリ此中又二種ニ分ル【61】

Eleatic Schools
- 1. Metaphysical School
  此学派ハ大ニ「ピサコラス」ノ説ヲ進化セン所アルカ如シ
- 2. Physical school
  此学派ハ「アイオニック」ノ一変シタルモノノ如シ

〔以下次号に続く〕